

「子ども」について語り、つながる！ 園・小学校の対話の3ステップ

対話ステップ

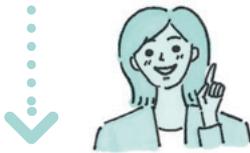
1 育みたい子ども像

🕒 対話の時間のめやす 20分

架け橋期を通じて、私たちはどのような子どもを育てていきたいか

園と小学校の保育・教育を連続的に捉え、それぞれの活動の改善について考えるためには、まず、育みたい子ども像について語り合うのがよいでしょう。その際、「〇〇ができる子ども」「〇〇な資質・能力をもった子ども」といった「めざす姿」を言葉にするだけでなく、園や小学校の日常の中で実際に見られた子どもの姿を具体的に話すと、話が深まりやすくなります。保育者と小学校の先生が混在した4、5人のグループをつかって、「ある子どもが遊びの中で友だちとこんな関係を見せてくれた」「ある子どもは授業中にこんな行動をした」などと話していきましょう。幼保小共通の資料として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）を印刷して参加者に配布すれば、それを手がかりに「そういえばあの子どもがこんな姿を見せてくれたな」と思い出しやすくなります。

子どもの生き生きとした姿を共有する中で、保育者と小学校の先生方はきつと温かな気持ちになり、安心して連携の話し合いを始められるのではないのでしょうか。



ファシリテーター役から参加者への声かけ例

「最近、目にした『すてきな！』と思った子どもの様子を紹介してみましょう」
「子どもの様子が目に浮かぶように、できるだけ具体的な場面を挙げて話してみましょう」
「紹介し終わった子どもの様子は、模造紙や付せんに書きとめておきましょう」

対話ステップ

2 遊びや学びのプロセス

🕒 対話の時間のめやす 20分

育みたい子ども像に、幼保小ではどのように近づいていくのか

園と小学校で、日々の子どもの様子から育みたい子ども像に迫ったら、それはどのような遊び・学びのプロセスの中で実現したものなのかを語り合ってみましょう。グループ内で挙げられた子どもたちの姿について、「この子はこうした行動をするようになるまでに、このような変化をしてきた」などと話していきます。たくさんの事例がグループ内で挙げられたら、園と小学校それぞれで、参加者が特に変化のプロセスを聞きたいと思った事例に絞るようにします。子どもたちが行きつ戻りつしながらも、保育者や小学校の先生方の想定を超えて成長していることが実感でき、参加者は改めて架け橋期の教育のやりがいを味わえるでしょう。

子どもの変化を語る際には、子どもの様子をできるだけ広く捉えて語るように心がけます。例えば、友だちとの関係で変化を見せた子どもについて語るときは、その子の保護者とかかわり方や遊びへの向かい方なども思い出してみると、より子どもを総合的に捉えることができるでしょう。



ファシリテーター役から参加者への声かけ例

「グループで紹介された子どもたちは、どのように成長してきたのかを話してみましょう」
「子どもの成長を広い視点で捉えられるよう、成長過程でのさまざまなエピソードを紹介してみましょう」
「子どもの成長のプロセスを聞く中で、驚きや発見があったら、模造紙や付せんに書きとめておきましょう」

現在、各地で保育者と小学校の先生方との交流の取り組みが行われています。幼保小の交流を互いの保育・教育をよりよくするきっかけとするには、「子ども」を軸に対話を行うことが大切です。ここでは架け橋期の子どもの姿や発達について、小学校の先生方と語り合う際の3つのステップをご紹介します。園と小学校との交流の取り組みを、よりよくするためのヒントとしてご活用ください。

対話ステップ

3

指導上の配慮

🕒 対話の時間のめやす 20分

遊びや学びを深めるためのかかわりとは

園と小学校それぞれが、育みたい子ども像に近づいていくための遊びや学びのプロセスを、子どもたちの具体的な様子をもとに語り合ったら、次は、そうした成長を支援するために、保育者や小学校の先生はどのように子どもにかかわっているのかを語り合います。「自分はどのようにその子どもを見守ったのか」「自分のかかわり方をどうやって決めていったのか」を話すことで、互いの支援の共通点や相違点を考えることができるようになります。

グループで子どもへのかかわり方を語り合う中では、「自分なら別のかかわり方をする」「そのかかわり方には賛成できない」といった違いを感じる場面が出てきます。支援の形は子ども一人ひとりで異なり、正解はありません。そこで、話し合いに先立って、自分とは違う考えに直面したときは、「なぜそうした違いが生まれるのか」「自分の知らないよさがあるとしたらそれは何だろう」と考えてみることを勧めるなど、異なる価値観への向き合い方をアドバイスしておくといよいでしょう。



ファシリテーター役から参加者への声かけ例

「ここまで取り上げた子どもの成長に、保育者・先生としてどのようにかかわってきたかを話してみましょう」

「成功談だけでなく、失敗や迷い、不安も話してみてください」

「自分とは異なるかかわり方に出合ったとき、すぐに否定せずに、『そのようなかかわり方をするよさは何だろう』と考えてみてください」

教育活動の改善に向けて、対話を振り返る

🕒 振り返りの時間のめやす 20分

話し合いの最後に、参加者それぞれがどのような気づきがあったのかを整理するための振り返りの時間を設けます。

振り返りの3つの観点

- ① 今日の対話の中で心に残ったエピソード、参加者の言葉は何か
- ② 保育者（小学校の先生）として、自分が大切にしていきたいことは何か
- ③ 幼保小が連携して子どもの育ちを支援するために、自分ができそうなこと、やってみたいことは何か

幼保小の対話を具体化させるためにドキュメンテーションを活用しましょう！

保育者と小学校の先生方の対話を充実させるためには、日々の保育・教育の場面を思い出しながら、具体的な子どもの様子を語るようにすることが大切です。子どもの様子が具体的であるほど、参加者の捉え方にズレがなくなりますし、子どもの様子を生き生きとイメージできることで、温かな雰囲気の中で対話が進んでいくからです。

しかし、初対面の人が多い話し合いだと緊張してしまい、普段の子どもの様子を思い出しにくい参加者もいるかもしれません。そこで参加者同士が子どもの姿を具体的にイメージするためのきっかけとして、園であればドキュメンテーションを活用するとよいでしょう。最近では小学校でも、生活科や図画工作科、特別活動などでドキュメンテーションを作成するケースがありますが、もしもドキュメンテーションとして作成していない場合は、子どもの活動の様子を収めた写真などを持参してもらいましょう。